

な

ご

み

つ

う

し

ん

発行日：平成30年5月28日(第41号)

発行：島田療育センターはちおうじ

「いのちの授業」を行ってみて、まず浮かんだのは母のことでした。母の死はあまりにも突然でした。感謝の言葉を伝える機会もないまま、天国に逝ってしまいました。

「いのちの授業」で一番勉強させてもらったのは私だったのかもしれませんが。平成24年4月に旅立っていった我が母のことを紹介します(3)。

所長 小沢 浩

～実るほど、頭(こうべ)の 垂れる稲穂かな～

結婚してからは、3人の子どもに恵まれた。長女、長男、次男である。次男である末っ子が私である。父は子どもは2人でいいと思っていたらしい。3人目の私は

「墮ろせ」

と言っていた。それを母は

「絶対産む」

と言って、頑として受けつけなかった。

そして私は産まれた。小さい時の私は父によくなついていた。父がするめを食べていると隣で口を開けて待っていた。その食べかけのするめを父からもらう。いつしか父は私を一番かわいがっていた。そんな私は3歳まで言葉を発しなかった。そして話をしだしたと思ったら、どもっていた。私はとにかく変わっていたらしい。いったんヘソを曲げると1日押入れから出てこない、怒られると家出をして夜遅くまで帰ってこない。4歳のときである。とにかく頑固であった。また保育園では女の子によく泣かされ、半分く

らいしか保育園に行かなかった。

父は家庭を持ってからも酒をとにかく飲んだ。子どもはよく父のお酒を買に行かされた。父は夜中に帰ってきては子供を起こす。姉が

「やめてよ」

と言うと、

「父親に口答えするとは何事か」

と姉を殴る。姉がトイレに逃げると、父が電気を消す。暗くて

「怖い」

と姉が泣く。母が電気をつけようとすると、母を殴る。そんなことが日々続いた。父が怒ったときの口癖はいつも

「中学出たら働け」

であった。



このままでは、子供を大学に行かせることはできない。そう考えた母は働くことにした。しかし、父は母が働くことには大反対だった。そのときはよくけんかをしていた。でも母は折れなかった。ついに仕事を始めた。旅館の厨房、観光施設の調理場、工場のパートと少しでも条件のいい仕事を選んだ。母は、塩をなめてでも子どもを大学に入れると言っていた。おかげで、3人とも大学に行くことができた。

父は、私が中学3年のときと高校3年のときに倒れた。脳梗塞である。徐々に機能が衰えていく。ついに寝たきりになった。そんな父を母はずっと看病していた。私が父に思い出を語ると、

「でもあの人はお酒を飲んでいないときは優しいのよ。お金にもきれいだし、本当にいい人なの。」
と言っていた。

私は、高校2年のとき、「飛鳥へ、そしてまだみぬ子へ」という本を読み、今まで目指していた教師の道を変え、医学部へ行きたいと宣言した。「飛鳥へ、そしてまだみぬ子へ」とは、骨肉腫に侵された医師井村和清が、最後まで命をかけて働きぬき、子どもたちに書き記した本である。でも私は、医学部に入るには遙かに及ばない成績であった。母は何も言わなかったが、私の知らないところで担任に相談に行ったらしい。担任は、

「1回では覚ええないけれど、何回か繰り返すと理解する。受かる可能性はないわけではない。」

と言ったらしい。だから好きにさせてみようと思った。後でそのことを知っ

た。兄弟の中でただ1人浪人をしてしまったが、それも何も言わないで許してくれた。1年の浪人の後、何とか医学部に拾ってもらった。でも私は浮かれていたのであろう。合格を母に最初に報告したときに言われた一言は「実るほど頭（こうべ）の垂れる稲穂かな」であった。

私は卒業するにあたり小児科を選んだ。臨床実習で出会った神経芽細胞種（小児がんの一つ）の子の担当になったとき、この子を何とか治したいと学生ながら必死になった。その子が私を小児科へ導いてくれたのであった。医師2年目に都立八王子小児病院へ移り、新生児科、小児科で働くにつれ、障害児を診る機会が増えてきた。目の前にいる障害児とその家族を診ているうちに自然と障害児医療の道に進むようになった。

医師として働き始めた時は、夜遅くまで働くのを心配していた。

「体は大丈夫？無理しないでね。」
が口癖になった。そんな母に心配をかけたくないので、仕事の話はしなくなっていた。



『奇跡がくれた宝物』
小沢浩 著

クリエイツかもがわ
より発売中